

『美術資料』（2012年改訂版）の編集に当たって

教本・図書資料委員会

2012年4月の発刊から半年が過ぎたところではありますが、今号と次号の「美」の2回にわたって、編集作業のまとめを報告させていただく機会を頂戴し、編集の概要や今後の課題について述べさせていただきたいと思っております。

なお、現場の先生方には、ぜひ、『美術資料』に対するご意見・ご感想をお寄せいただけますよう、また、授業で活用していただいての新たなアイデア・生徒達の感想などもお聞かせ願えましたら、今後の参考にさせていただきたいと存じます。そして、この『美術資料』が、中学生たちにとって卒業後も手元に置いて大切にしたいと思える本であることを編集委員一同願っております。

I 編集の概要と今後の課題

太田 智子

1. 編集の基本方針

これまで本研究会が中学校美術の副読本として携わってきた『美術資料』編集における基本方針は次の通りである。

(1) 美術による人間教育

美術は人間にとって欠かせないものであることを、中学生に感じ取ってもらえる本であること。作品を通じて作者の心情に迫ったり、その作品がつけられた時代やその土地に生きた人々の生活のありさまを思い描くなどして、人間をより深く理解することは鑑賞教育の重要な柱である。そうした人間の

ぬくもりや人間性を、中学生の視点で共感の目をもってとらえられるように、テーマ設定や作品設定で配慮していく。

(2) 鑑賞教育の充実

鑑賞（美術作品をみること・美術作品にふれること）の楽しみを味あわせられる本であること。最初から知識として美術作品にふれさせるのではなく、表現の主題・内容・方法・作者の心情などの着眼点（鑑賞のテーマ・ポイント）を示して生徒に考えさせる授業を想定して編集する。作品をみる視点など鑑賞

の道筋をわかりやすく導入することで、自らが鑑賞の楽しみを見だし、美術のよさや創造性を感受できる感性を育てていく。

（3）美術文化を通しての国際的理解、 伝統文化の継承

日本をはじめ、世界の美術文化のすばらしさを中学生に伝える本であること。多様な表現のあることを知り、自分とはちがう世界を想像し、共感したり、異文化を理解することで視野を広げる。また、自国の文化や伝統のよさに気づき、それらを受け継ぎ、発展させていく態度を育てていく。

以上を基本としながら、今回の改訂でも、感性・知的好奇心・思考・判断などを促すよう、実感を伴って理解できる内容を練っていくことや、中学校卒業後も手元に置いて活用していける本として生涯にわたって美術に親しむ態度の育成ということを、念頭に置きながら編集に取り組んだ。

2. 編集の流れ

今回の改訂は部分改訂とはいえ、他社の動向もふまえつつ、2010年9月より編集作業が始まり、既存ページの見直し・巻頭の折り込みページや新設テーマの検討などを行い、2012年2月に最終校正を経て4月の発刊に至った。

今回の改訂にあたっては、他社が学習指導要領の改正とともに新版を出してきたこと、また、現場の副読本採用

状況の変化などによる販売部数の減少ということから、内容はもちろんのこと、使いやすさ（表現編との合本ということでの、1冊の本としての使い勝手）も考慮することが会社からの要望としてもあった。そのため、巻頭の折り込みページの内容については相当な時間をかけて議論した。（詳細は次項）

3. 編集のポイント

今回の特色としては、次の2点があげられる。これらは「現場からの意見」を参考に検討したものである。

（1）巻頭ページ＜美術を通して、学ぶ ことの意味を考えられるページに＞

この折り込みの表と裏については、繰り返し議論を重ねてきた。

先ず表のページについては、大きな図版の候補作品としていろいろな作品が挙げられたが、最終的に小野竹喬『奥の細道句抄絵 田一枚植糸で立ち去る柳かな』を選んだ。田植えを終えたばかりの水田に映る青い空と白い雲。作者の自然を見つめるまなざしが、決して中学生の自分たちとかけ離れたものではなく、むしろ、親近感のあるまなざしである。しかし、当たり前の風景だからこそ見過ごしがちな、はっとさせられる新鮮なまなざしに、身近な自然の美しさに気づかされ、そこから、美術を通して学ぶことの意味を問うことができるのではないかと考えた。

「自然と人間とが悠久な心で通い合

うと云うことは、東洋だけにしか見られないことかも知れない。(中略)自然は色々の事を人間に教えてくれる。しかし教えられる人間が、それを生かすか、生かさなないか、ここが大きな問題点である。」(『三彩』268 1971.1)

この、小野竹喬の言葉からは、自然に寄り添い自然とともに生きてきた日本人の感性をあらためて見つめ直し、そして、身体全体(五感)を使って感じ取り(自然から学び)、自ら考えることが大切であることが伝わってくる。それらは、物事を想起する力、思考し判断する力のもととなり、これからの社会を生きて行く力につながるのではないか。そのような意味を、次のようなオリエンテーションの言葉に込めた。

自然の顔はさまざまです。

私たちに豊かな恵みをもたらすこともあれば、ときに厳しい姿を見せることもあります。

当たり前のように感じる、いつもの景色も永遠にあり続けるとは限りません。美しい形や色彩、大切にしたいものの…。

自然をよく見て、感じて、学んだことをどのように生かすのか、考えていきましょう。

次に、折り込みページの裏側であるが、ここでは表現と鑑賞が表裏一体のものであることを分かりやすく伝える

ことをねらいとし、当初の案では「ビジュアルインデックス」として、表紙裏の目次とは別に、表現編と鑑賞編の関連するページごとに項目をまとめた目次と、形・色・材料・技法などの素材から発想を広げて表現へと結びつけられるような写真資料とで、イメージを形にして行く過程を視覚的にレイアウトする計画であった。そして、折り込みの部分を開いた状態にしておけば、いつでも目次が目に入るように目次の欄を左端に寄せ、関連のページを探しやすく授業で活用していただけるのではないかと考えていた。

もともと、このページの構想の根底には、[共通事項]を意識しようというものがあつた。学習指導要領では[共通事項]として、形や色などの造形要素を捉えることと、形や色などをもとにイメージをもつことに関してふれられているが、ここでは、美術を支えるものとしての文化(歴史・伝統・地域)が土台としてあり、美術を形づくるものとしての造形要素(形・色など)や材料・技法などが関連し合つてイメージのもとが生まれ、これらを組み替えながらさらに発想を広げ、表現し、そこからもう一步踏み込んで考える(自分の考えを深める)ということにつながれば、との願いを込めたものであつた。

しかし、実際には出版社による諸々の事情から、表現と鑑賞をリンクさせた目次は残つたものの、イメージを形

にして行く過程の写真資料の案は実現せず、もう一つの大きな図版として立体作品(環境デザイン)を載せることになった。→アントニ・ガウディ『グエル公園』

(2)新設テーマ <日本美術のよさを多角的に伝えられるページに>

今回、4つの新設テーマとして、

- ①[琳派] 時代を超える「かたち」の魅力(p.118)
- ②[洋画と日本画] 西洋との出会い(p.122)
- ③[手づくりの技] 地域の素材を生かす手仕事(p.134)
- ④[彫刻] 形にこめた思い(p.138)

を加えた。

①では、琳派の魅力を暮らしの中のデザインとの関連から「かたち」をテーマにして取り上げた。自然を愛でる感性が「時代を超えて」現代へとつながっていることに思いをはせてもらいたい。

②では、ここ数年、近代の美術が取り上げられていないとの反省から、明治維新後、西洋の美術文化が与えた影響について考えさせるページとした。ジャポニズム(p.104)と関連させて鑑賞できると興味・関心を高められるのではないか。また、掲載作品の中の、青木繁『海の幸』、高橋由一『鮭』などは、私たち(40代以上)にとっては教科書や『美術資料』などの副読本で思い出深い懐かしい作品である(もう少し若い保護者の世代では、教科書で取り上げ

られることはなかったかも知れない)。特に今年は、東京と京都で高橋由一展が開催されており、鑑賞を深める良い機会である。

③は、旧版から続く「[伝統工芸]使われることが喜びに」というテーマに関連し、資料性を高め、総合的な学習としても活用できるページとして新設した。

以上①から③は、日本の文化・伝統への理解を深めることをねらいとし、暮らしの中で工夫、洗練されてきた日本の美意識を再発見し、次代を担う子どもたちに、これらの心を受け継ぎ新しい時代を切り拓いていってもらいたいという願いを込めたものである。

また④は、旧版で取り上げられなかった[彫刻]のテーマを復活させたものである。今回は、人間あるいは人のかたちをテーマとした作品を集めたが、立体の魅力や素材への関心とともに、それぞれのかたちに込められた作者の思いを想像し、人のかたちに託して表現することの意味についても考えてみて欲しい。ただ、立体作品を掲載するに当たって難しいところは、写真に撮られたアングルからしか紹介できないことである。立体作品のおもしろさは、空間の中にあるその存在感を実感したり、また、色々な方向や角度からみることにより変化する形のおもしろさや、質感から受けるイメージを感じ取ったりできるところである。実物を見なければ本当の良さは伝わらない

点は平面作品でも同様であるが、特に立体作品では重要である。そういう点からも是非、機会があれば、『考える人』のある静岡県立美術館のロダン館や、ヘンリー・ムーア『家族』のある彫刻の森美術館へ訪ねられると興味深いと思う。

4. 今後の課題として

今回の改訂版でも、編集の基本方針としてのバックボーンは大切にしつつ「資料集」としての性格を強めたことがその特徴である。「情報量が多くなった」という声もいただいているが、「情報」の質と量の検討は今後も続く。そ

の一方で、副読本としてのあり方を、今後は特に考えていかなければならない。この4月からの新しい教科書の傾向として、資料集的な性格が強いと感じるからである。この『美術資料』のように、表現編との合本の場合、教科書と副読本のそれぞれの役割をもっと考えていく必要がある。

また、今回も作品の選定と文章表現(中学生にわかりやすく、短い文章の中で作品のポイントを端的に押さえるということ)には重点を置いたつもりだが、この点については、現場の調査とともに今後も努力していく必要がある。

大谷大学短期大学部 幼児教育保育科

II 編集意図と巻頭ページ

横田 学

1. 教科書と『美術資料』

『美術資料』は中学校美術科の副読本(教材)として編集している。副読本とは、一般に学校教育における教科書の補助的教材を意味するが、それでは、教科書と副読本は何がどのように違うのだろうか。例えば国語の副読本である『国語便覧』は、文学や国語に関わる情報・知識を知るのに便利で調べやすいように編集したハンドブックであり、社会(歴史)の『歴史年表』は、歴史的な内容について調べやすいように年代順

に編集したハンドブックある。これらの場合、主教材としての教科書と副読本の役割の違いが明確あるが、美術の副読本の場合はどうだろうか。

学校教育における多くの教科は、学習指導要領に示された「内容」の獲得・定着が、その「目標」の達成に直接つながるのに対し、美術科の場合あくまでも「内容を通して目標を達成する」とこととなる。さらに、その「内容」の記述も、絵・彫刻・デザイン・工芸・鑑賞と領

域や分野は示しているものの、具体的な題材やその指導方法には全く触れていない。この学習指導要領をもとに編集された美術の教科書の内容は、これまで学習の目的や学習方法についての記述はあまり見られず、題材を提案する形でまとめられることが多かった。

さらに、今回の学習指導要領の改訂では、学習内容を育成する資質や能力の視点から整理をし、発想や構想の能力、創造的な技能、鑑賞の能力のいずれを育成するときにも共通に必要な資質や能力を整理し〔共通事項〕として示した。このこともあってか、各社の平成24年度用新版中学校教科書を見ると、

- 課題解決の喜びを得るような内容や、なぜ学ぶのかという目的意識を取り入れた話題・題材の充実
- 生徒が興味関心を持って読み進められる話題や題材の工夫
- 生徒が主体的に学習できる丁寧な記述や文章量の充実

などの改善が図られ、その記述内容や方法が従来の『美術資料』など中学校美術科の副読本に近付きつつあるように思われる。

ただし、前記のように教科書が教科書検定と言う制度によって、学習指導要領をもとにトップダウン的に編集されるのに対し、『美術資料』などの副読本は、実際に学校で行われている、具体的な授業の目標や内容から発想するボトムアップ的な編集である。この点

が、教科書と副読本の違いを考えるポイントになると思われる。

今回の『美術資料』の編集を進めるにあたっては、各社の教科書見本が明らかになるにつれて教科書との違い、つまり『美術資料』の編集意図をどのように伝えるか編集会議で繰り返し検討することとなった。

編集意図を明示する方法の一つとして、教師用解説書の刊行が考えられるが、秀学社編集の表現技法編と本研究編集の鑑賞編の合本となった現行の『美術資料』のシリーズは、教師用解説書を刊行していない。（本研究会の美術鑑賞教本は、昭和29年都出版より刊行の初版と表現・鑑賞の合本となった現行シリーズ以外は教師用解説書を刊行している）

特に、各ページのテーマ設定、掲載する作品図版、解説の文章、レイアウトなど全て、「このような授業の場面で活用するなら～」「こんな指導をする時には、やはりこの作品を掲載したい」と、具体的な授業の場面設定を考えて編集しているが、それらの意図が本当に教育現場の先生方に伝わっているのだろうか。出版社の編集担当から教育現場からの意見を聞かせて頂いても、必ずしもうまく伝わっているとは思えないのが事実である。

なお、今回の改訂では、巻頭の折り込みページに編集意図を伝える手助けとなる機能を持たせられないか検討を進めた。

2. 巻頭ページ検討の経緯

編集作業の過程で、どのページも図版の入れ替えやレイアウトの変更を何度も繰り返したが、この巻頭ページについては、前述したように編集意図を伝える機能をどのように持たせるか特に時間をかけて検討した。編集会議録(抜粋)から、その概要は以下のとおりである。

○2010年9月27日

- ・見開き(2ページ)は学習指導要領の〔共通事項〕の考え方。表現と鑑賞がつながるようなページとする

○2010年11月22日

- ・(表現編と鑑賞編の合本であり)表現と鑑賞をつなぐ何かが必要である。この本をつかう皆さんへのものが必要であるが、ただの導入に終わらせたくない。作品と絡めて(共通事項に関わり)色・形・素材…表現の指導に使うもよし、追体験としての鑑賞の指導としても活用可能なページに。
- ・インデックス(目次)をかねた(本書活用の)導入の位置付けとし、見開きの表は作品1点+なぜ美術を学ぶのかの文章を(表紙とは違う作品で)、見開きの裏は色・形・素材・イメージなど共通事項の項目(キーワード)を取り上げ、関連作品を掲載したり関連するページにリンクを貼る。

○2010年12月23日

- ・巻頭作品(表面)は日本美術で、中学生にぴったりの作品はないか教科書(掲載図版)との関連も考え検討する。
- ・共通事項(裏面)については、他社の(巻頭に示している)内容は現行本にも分散して入っている、他社の後追いはせず見せ方で工夫したい。

※巻頭折り込みのページについては、2010年春に改訂した他社が巻頭に学習指導要領の〔共通事項〕に関わるページを集めて掲載し、その評判が良いことから検討を始めている。「この本をつかう皆さんへ」「なぜ美術を学ぶのか」のような編集意図に関わる内容の必要性についても最初から検討項目として取り上げている。

○2011年2月5日・6日

- ・巻頭作品(表面)を日本の美術にするか、西洋にするかを定める。一案として小野竹喬「奥の細道シリーズ」を検討。決して簡単に描いたものではないけど、(中学生でも)自分にも描けそうに身近に感じられる。解説でも句を紹介できる。
- ・一方、西洋美術だと、画家のことばとの組み合わせ クレー、セザンヌ、モネなどが考えられる。東西問わず、(中学生が)自分たちもできそうと思わせる作品。あまりに巧みすぎるのは避けたい。巻頭作品については、小野竹喬で1点。西洋作品についてはまた考える。
- ・巻頭裏面をどうするか、イメージを

広げよう。(このページを見た)生徒がイメージを広げる、自分のイメージを具現化するためのガイドになれば良い。キーワードからビジュアル目次、発想の手立て、鑑賞の切り口、ワクワクする、美術が楽しくなるような内容が必要。(巻頭のこのページから)リンクする先を考える。(編集意図にも関わり)発想とか見方とかガイドできるような簡単な説明文を入れたい。

※表面の図版について、この時点ですでに小野竹喬「奥の細道シリーズ」の案が出された。裏面については、考え方の話が繰り返され、具体的な検討は進まなかった。

○2011年2月28日

・共通事項(裏面)は、実際に授業で使ってもらえるものにしたい。(美術の授業に関わる)キーワードをすべて入れてしまうのは良くない。イ

メージをとらえるのは生徒自身であり(生徒に)考えさせたい事もあるし、また先生が(自分の口で)伝えたいということもあるので、どこまで載せるか検討が必要である。

・(最初の授業の)オリエンテーション的な要素として、30分程度の授業ができるイメージにしたい。教科書、授業につながる位置づけや折に触れて、使えるページとして位置づけも考えられる。

※裏面について、学習指導要領の〔共通事項〕の文章の中からキー



【図1】巻頭裏面の最初のイメージ

【図2】具体化しはじめた巻頭裏ページ

ードを抽出し、それらのキーワードと『美術資料』内容がリンクするようなページにする方針を決定した。(美術の授業で何を学ぶのか→各ページの内容)具体的に編集部で案を作り実際に中学校の先生方等を対象にヒアリングを実施することとなる。

※この編集会議後、3月11日に東日本大震災があり、秀学社東京本社も移転。この後の編集会議では東日本大震災の事を盛り込んで作品の選定や内容を検討することとなる。

○2011年5月1日

- ・巻頭裏の原案に対するヒアリング結果については、秀学社案にはおおむね賛成という意見がある一方で、実感が持てない、表面で一人の作家(例えば岡本太郎)を大きく取り上げ、裏面で作品をできるまでの発想のプロセスのようなものを見せられたら良いという意見もある。
- ・巻頭は工夫をして目を引く事が必要。(営業的に)表現と鑑賞のつなぎになったら良い。そもそも共通事項をどう扱えば良いか分からない先生方に、いかにビジュアルにアピールできるかが課題である。

※ヒアリングの結果は単に学習指導要領の[共通事項]から抽出したキーワードと『美術資料』各ページを結びつけても、どのようにして巻頭裏のページを使うのか分からないと言う意見が多かった。やは

り、キーワードに沿った目次と単にページ順に表題が並んだものとの違いや、授業での活用方法について意図が伝わっていない。

※巻頭裏については、もう少し編集意図が伝わるような内容で作成しなおすこととなる。

○2011年5月21日

- ・巻頭裏の折り方表面が外側になるようにしたい。また、巻頭表の作品から表現扉へとつながるような工夫がほしい。(巻頭5ページでデザイン的にも一体化)また、表現編の扉も巻頭の作品との関連。作業風景、制作の痕跡がわかるようなものにできないだろうか。

- ・巻頭裏に伝統・文化の要素が入らないのはおかしい。地域・伝統・文化などのキーワードも必要である。地域・伝統・文化より歴史・地域・伝統のほうが良い。また、(美術に関する用語などが理解できているかチェックする)学習チェックリストについては知識理解を特に重視するのではないが、義務教育ということを考えれば、知ってほしい必要なことだと思う。テストにも使えるようになれば、教師にとって便利

※巻頭裏に授業の中で押さえない用語などを集めた学習チェックリストを組み込む事を提案する。学習チェックリストについては賛否両論であったが、授業で使えるページにするためにも、記載するこ

ととなる。（チェックリストの内容については今後さらに検討）

○2011年7月17日

- ・学習チェックリストについて何を取り上げるかが課題。入れるのだったら、中途半端に入れても使えない。実際、学習チェックリストのすべてを網羅できないので、美術資料の内容との関係。内容として説明されていないものには触れない。
- ・〔共通事項〕という言葉は指導という立場の言葉であり、教師用指導書であれば成り立つが、生徒には無縁のもの。〔共通事項〕を噛み砕いて言い換えてできないか。ページタイトルは「美術の森に遊んで、あなただけの木を見つけよう、育てよう」こんなタイトルがあると（編集意図とも関わり）良い。

※巻頭裏について、学習チェックリストは使えるページにするためには必要であるが、編集意図を伝える事には繋がらない。一方、〔共通事項〕と言った無味乾燥なものから、夢のあるタイトルが提案され、このページで何を伝えるのか最終的な見通しを持つことが出来るようになる。

○2011年8月19日

- ・巻頭表は小野竹喬の作品、自然の見たままを素直に表現している風に見える。作品の配置・大きさも検討。・小野竹喬のことばは、自然は色々な事を人間に教えてくれる。

- ・巻頭裏はおおむね内容が決まり、写真がまだダミーなので、これから作りこむ。イメージなのでアイデアスケッチなどもほしい。生徒が何かを作っている場面などがあれば親しみがわく。※震災との関係もあり、巻頭表の図版は東北を題材とし、心安らぐ自然が感じられる小野竹喬句抄絵にほぼ決定する。

○2011年9月13日

- ・営業など出版社からの意見では、巻頭面の小野竹喬が弱い、裏面は文字が多い。
- ・表面にインパクトのある作品をとの意見だが、不易なものとしての自然をとりあげたつもりである。自然と人の関係。今見つめてみたい自然。さらに「この本を使うみなさんへ」的な要素も必要である。
- ・裏面について検討を進めてきたが、（最終的に出版社の理解が得られなかった）作品図版だけにする手もあるが、折り方の工夫で共通事項の考え方を（目次として）残す。※巻頭表の図版については、出版社からの意見もあったが小野竹喬で最後まで譲らなかったが、巻頭裏については使えるページとして完成度を上げたつもりであったが、最終的に必要性の理解が得られず、キーワード目次のみを残し、表現編の扉ページとのつなぎでアントニ・ガウディ『ゲエル公園』の図版を掲載することとなった。



【図3】掲載されることがなかった最終段階のイメージ

編集する者は編集者としての意図を持ち、しかしながらこの『美術資料』を使用する先生方もまた先生方への授業の目標や教授の意図を持って授業を行う。日本中にある中学校も生徒もそれぞれ多様であり、『美術資料』の同じページを教材として授業を行っても、2つと同じ授業はない。編集意図は使用者の授業を決して縛るものであってはいけないと思うが、前述の本研究会の編集の基本方針にあるように、より良い鑑賞(美術)教育を目指すためには「何故この図版を選択して掲載し」「なぜ、このように解説したのか(場所によっては、なぜその事を解説していないか)」などについて、伝わるような手

立てをしっかりと行いたいものである。

今回の改訂に向け、教科書と『美術資料』の違いは何か、また、編集意図を分かり易く伝える手立てはどのようにすべきか検討を進めることが、これからの教本・図書資料委員会の宿題となった。

京都市立芸術大学美術学部 教授